

《インディアカ》

・バドミントンのシャトルのように羽根がついたボールを、バレーボールのようにネット越しに手のひらで打ち合うゲームです。

写真



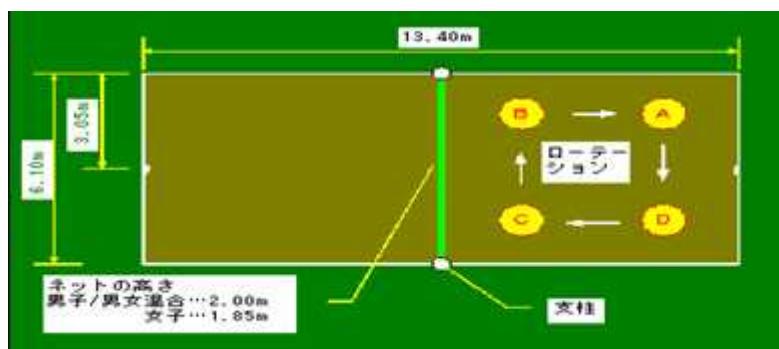
起源

- ・南アメリカのインディアンが、トウモロコシの葉を束ねてつくったものを打ち合っていたのが起源。
- ・1930 年代末にドイツのケルンにあるスポーツ学校の教師「カールハンス・クローン」が、ブラジルの伝統的なゲーム「ペテカ」をドイツに持ち帰り、その用具に改良を加え、インディアカゲームを考案した。
- ・インディアカの名称の由来は、「インディアン」と「ペテカ」であり、その合成語として生まれた。

人数

- ・4 人対 4 人

場所



- ・体育館、グラウンドなどで行う。
- ・コートのはさは区画線を含んで長さ 13.4m、幅 6.1m である。
- ・一般的にはバドミントンダブルスコートの外側ラインを使う。
- ・ネットは、シニア女子 1.85m、シニア男女混合と女子 2.00m、男女混合と男子が 2.15m とする。

進め方

- ・ジャンケンでコートかサービス権かを決める。各チームはコート前方に 2 名、後方に名が位置する。
- ・サービスは後列右に位置するものがトスをし、アンダーハンドで打つ。(1 回だけ)
- ・レシーブは 3 回までで相手側に返す。この間インディアカが床に触れるか、コート外に出るか、または、反則があったら相手側(サービス側)の得点となる。
- ・サービスの失敗、またはレシーブボールが返ってきて、サービス側がミスまたは反則をした場合は、レシーブ側にサービス権が移る。
- ・サービス権を得たチームは、プレイヤーの位置を時計回りに移動(ローテーション)し、後列右側のプレイヤーがサーバーとなる。

勝敗の決め方

- ・15 点先取すれば、1 セットをとる。14 対 14 のときは、ジュースとなり、2 点先取した方が、そのセットをとる。2 セット先取したチームが勝ちとなる。
- ・サービス権を持っていないチームは、ポイントを得ることはできない。

その他の

- * 主な反則は、次のとおりである。
- ・ひじから手先までなら、両手のどの部分を使ってもよいが、インディアカを手のひらで静止させてはいけない。(ホールディング)
- ・チーム内でのパスは、3 回まで(ただし、インディアカがネットに触れた場合、その数は数えない。)、3 回を超えるとオーバータイムスとなる。
- ・同一者が続けて 2 回以上インディアカに触れてはいけない。(ドリブル)
- ・競技者がネットに触れてはいけない。(タッチネット)
- ・サービス時にエンドラインやサイドラインの延長線上を踏んだり越したりしてはいけない。